

# 山村集落の生活組織とムラ結合の推移

## ―秩父郡吉田町太田部集落の場合―

釜 下 仁

### 一、“家抱制”について

秩父郡吉田町太田部集落は、秩父郡の西北部、北は神流川（下久保ダム）を隔て、群馬県と隣接する上武国境の塚山（九五三・九メートル）の山腹に位置する典型的山村である。

平坦地は皆無であり、地味貧しい斜面を、“さかさうない”という固有の耕法により商品作物としてコンニャクと自給的な麦・豆・野菜等を作付している。“さかさうない”とは、斜面の上から下に向けて、土をかきあげるようにして鋤を入れて行く耕法であり、機械は当然使用不可能であり、こうした重労働により耕作するのである。<sup>(1)</sup>また秩父山間の畑は、昭和初期まで焼き畑農法をもって切り開かれたのである。当集落においても、明治期の畑地の六二%が焼畑である。<sup>(2)</sup>自然的地理的にかなり劣悪な条件の中に存するのであるが、さらに天和三年（一六八三年）武州秩父領内児玉郡太田部郷御改之村鏡帳によると、当時から商品の生産に依存している事がわかる。<sup>(3)</sup>

### ―前略―

- 一、百姓家職は男女共に春冬は紙しき申候。男者夏秋は耕作仕候。女はかいこ絹仕候。
- 一、市用は鬼石吉田小鹿野にて調申候道法は鬼石二里半、小鹿野へ三里半程御座候。
- 一、鬼石市にて絹紙薪木かや藤縄売申候。
- 一、当村百姓の家職は紙肝要に御座候共、楮少御座候付、冬中より春、秩父上州にて買求すき申候而俵物買求暮。

— 中路 —

一、居村の儀者北向にて山鋪に御座候間、作物の儀も、身も入不申候。東向に御座候処者、白地にて歳より日損水損在之時、何程念入作仕付申候而も、麦秋作共に半年程暮し申、あらかた無御座候付、ところかづら計食物に仕候。

— 後略 —

主穀は半年の消費にも満たず、生産力の極めて低いことであり、その為早くから商品的生産に依存せざるを得なかった。山稼の外、絹、かいこ、紙、かや、藤縄を売って漸く生計を保ち得た。特に紙すきは原料楮を秩父、上州等の村外より広範に買入れる迄に至っている。<sup>(4)</sup>

こうした自然地理的条件による地域の生産性の劣悪さは、生活上強固な村落（Ⅱムラ）共同体的結合と複雑な部落慣行を作り出してきた。そして江戸期より終戦直前まで残存した「家抱<sup>ケダウ</sup>」制Ⅱ身分的隸属関係も当集落の経済的条件の劣悪性の中から、近世封建支配の対応形態として生じたと考えられる。

家抱制については、有賀喜左衛門氏が松田鑽氏の報告を「日本家族制度と小作制度」の中で、その身分的隸属関係について明らかにしている。本稿で取り上げた太田部集落とは神流川を隔て隣接する群馬県多野郡日野村小柏（現在の藤岡市上日野字小柏）における家抱制度についての事例である。<sup>(5)</sup>

当部落の大家小柏家は平維盛の庶子惟基が壇浦から没落して紀州に逃れた後、さらに当地に落ちて小松重盛の小松を小柏に改めた者と言ひ伝える。当時からの家臣がこれに従属して一〇〇戸ばかりになった。これを家抱<sup>ケダウ</sup>または小前<sup>コサキ</sup>と称した。…大家は小柏部落には全然血縁分家を持たず、家抱のみ居住を許し、また他からの移住を許すことはなかった。大家は家抱から上った多くの奉公人を使用して大手作を行い、また家抱の家から若い男女を取った。この男女が相当の年齢に達すれば、適当に選んで夫婦にし、家抱として分家させた。…これらの奉公人には給料はなかったが、小遣錢や仕着せは与えた。家抱は分家に際し大家から若干の田畑と屋敷付の山林、または屋敷および家屋を与えられた。田畑は家抱の作取り<sup>ソウリ</sup>で、現物小作料を出さず、その貢租は一切大家が上納した。家屋は大家が作り与えたものであるが、修理は各自がした。家抱には一軒前と半軒前との別があつて、これは家族の人数や生活状態によって定め、オテマ等に相違が生じた。すなわち家抱は大家から生活一切の世話を受けているかわりに

毎年納金とオテマと年末には歳暮を出したが、納金は一軒前は二分、半軒前は一分二朱、オテマは一軒前三六人、半軒前一八人歳暮は一軒前日野紙一〇〇枚、半軒前五〇枚であった。この皆納をする和大家は家抱に正月仕度をしてやったが、滞った際は正月をさせず、お飾りや門松を取り除かせた。オテマは蒔<sup>マシ</sup>仕<sup>シ</sup>付<sup>ツ</sup>、養蚕時にかわるがわるツトメさせ、農事以外の家事用をも加算したが、祝儀、葬式、屋根葺等の手伝は加えられなかった。大家は家抱に対して一切の裁判権を有していた。：家抱の縁談婚姻は一切大家の指図にまつのであって、これに叛くことはできなかった。：部落行事はすべて大家が中心となった。：維新の際上司の命令により家抱の解放が行なわれ、家抱は大家から受けた土地の私有を許されたのであるが、しかしそれは僅少なものであって、独立の生計に営むに足らぬことは旧藩時代と変らなかった。すなわち以前にはそれは彼らの所有権に属さなかっただけで、その耕作することに彼らの生計が依存していたのではないから、大家の経営に参与して彼らの生活が可能であった。明治初期における状態と同じで、彼らは自己の所有耕地の僅少な耕作経営では足りず、依然として大家に依存し賦役を出していた。：

以上のように身分的隷属関係である家抱制は、太田部集落と同様な自然地理的条件をもつ小柏の場合、平家残党の主従関係によるものと伝えられ、大家小柏家は家抱一〇〇軒を擁し一村全体に君臨していた。その身分的慣行については、小柏の場合と同様太田部集落についても、慶長年間より世襲名主として君臨した新井家を中心に存続してきた。その数的構成の変化を追ったものが第Ⅰ表である。

本村の家抱制は幕末に至るまで強固に存続している。総戸数では天和三年（一六八三年）以後幕末に至るまでに約二十軒減少する。この間本百姓は前期四十七、八軒、後期数軒を減ずるのみで略々固定しているといつてよい。これに対して家抱は前期約三十六名で殆んど変化しないが、後期には十七、八名となり、明治五年壬申戸籍では総戸数五三戸、内、百姓四四戸、地借八戸、神社一戸となっている。地借は勿論家抱の残存形態で、その身分的慣行は終戦直前まで存続した。<sup>(6)</sup>

次に本百姓・家抱の隷属関係を延喜四年の宗門帳によってみると第Ⅱ表の如くである。これを明治五年の壬申戸籍についてみると、抱主三、地借八で、そのうち五は名主の地借となっている。<sup>(7)</sup>

〔第Ⅰ表〕 本百姓・家抱数の変化

年 号	総家数	本百姓	家抱	寺	濃百姓	備 考
天和 3	89	49	37	3		明 細 帳
元禄 4		47				法 度 請 書
正徳 2	88	46	37	5		明 細 帳
享保 14	88	47	36	5		〃
〃 15	88	48	35	5		村 議 定 連 判
元文 1	88	47	36	5		家数男女書上
延享 4	84	49	30	5		宗 門 帳
安永 4	81	46	30	5	5	〃
寛政 2	78	?	?			明 細 帳
文政 8	68	45	18	5	10	宗 門 帳
〃 11	66	44	17	5	9	〃
天保 2	67	46	16	5	10	〃
		百姓 地借 神社				
明治 5	53	44	8	1		壬 申 戸 籍

〔出所〕 山田武麿「近世山村における本百姓の形成と家抱—武蔵国秩父郡太田部村の場合」群馬大学紀要人文科学篇 第4巻第9号 1955年 120頁

こうした名主・本百姓層に対する家抱の身分的隷属関係は、庇護と奉仕を基本原則に、世襲的にこの関係を保ちつつ、相対的に貧困な生活を維持持続させる一種の自衛組織であり、村落内部の共同体的対応形態である。そして、山間地に位置する自然的地理的条件は、地域的封鎖性と地域的特殊性を規定し、ムラビトにおいては八身分相応／＼分に甘んじる／＼的な限定的満足ゆえに世襲的に身分的隷属関係は維持されていたのである。

そして、自然的地理的条件の劣悪性による経済基盤の脆弱性と一定の自給自足的生活を原則として、こうした身分階層的支配の下に住民相互の日常のつき合い、冠婚葬祭時の相互扶助、自然災害への共同自衛を通してムラ単位に一つのまとまりのあるいわば、小宇宙性を形成してきたのである。

次にこうした山間集落の自然地理的条件と歴史的状況の推移を考えつつ、同集落の生活自治組織について考察してみたい。

〔第Ⅱ表〕 延喜4年における家抱の隷属区分（同年宗門改帳による）

組別	百姓数	抱主			家抱		奉公人		総戸数
		抱主数	身分	名前	家抱数	計	奉公人数	計	
Ⅰ	9	4	名主	八郎右衛門	6	16	3	21	25
			百姓代	源次郎	2		1		
			年寄	武左衛門	5		7		
			年寄	源兵衛	3		5		
			百姓	吉左衛門			5		
Ⅱ	6	3	年寄	半兵衛	2	8	0	3	14
			年寄	五郎兵衛	2		2		
			百姓	熊之助	4		1		
Ⅲ	17	1	年寄	武右衛門	1	1	0	0	18
Ⅳ	12	2	百姓	奎兵衛	1	2	0	0	14
			年寄	惣左衛門	1		0		
Ⅴ	5	3	年寄	勘右衛門	1	3	4	6	8
			百姓	理右衛門	1		2		
			百姓	奎右衛門	1		0		
計	49	13				30		30 (37)	79

備考1. 組名は不明であるが、太田部村五組を示すものであろう。

2. 奉公人の欄中（ ）内数字は抱主以外に一般百姓のもつ奉公人を含んだ数字である。

〔出所〕 第Ⅰ表と同じ

(1) 井出孫六氏は著書「私の秩父地図」の中で急傾斜地を耕作する秩父山間地農業について次の様に述べている。「むかしから、牛馬もほとんど農耕に使えない土地柄、しかも塊の多い地味貧しい斜面には「インガ」という八尺ほどもある長い柄の耕起具が使われてきた。八尺の柄をテコとして全身の重みをそこにかけて土を掘りおこすのだ。一日せいぜい二畝、一反歩の畑を四日でないきれもののはよほどの腕の持ち主で、秩父では通常、一反歩の「うない賃」は五人手間とされていたという。」八二〜八三頁 たいまつ社 一九七九年

(2) 山田武麿「近世山村における本百姓の形成と家控―武蔵国秩父郡太田部村の場合」群馬大学紀要人文科学篇 第四卷 第九号 一一八頁一九五五年の論文において「耕地は江戸期に比して約十町余増加しているがその中六二％は焼畑である。」と述べている。

畑反別収穫表(明治初年)

地種	反	別	%	収	穫(麦)	%
焼畑	六二町一反一畝二五歩		六二		六二石一二〇	三五
畑	三五、六、七、七八		三五		一一三、一五五	六五
宅地	三、〇、八、一一		三		〇	
計	一〇〇、八、七、一四		一〇〇		一七五、二七五	一〇〇

【出所】  
山田氏「前掲書」118頁

(3) 山田氏「前掲書」一一八〜一九頁。吉田町教育委員会、吉田町史編纂委員会編「吉田町史資料篇第二輯」一一〜一二頁 一九七六年

(4) 山田氏「前掲書」一一八〜一九頁

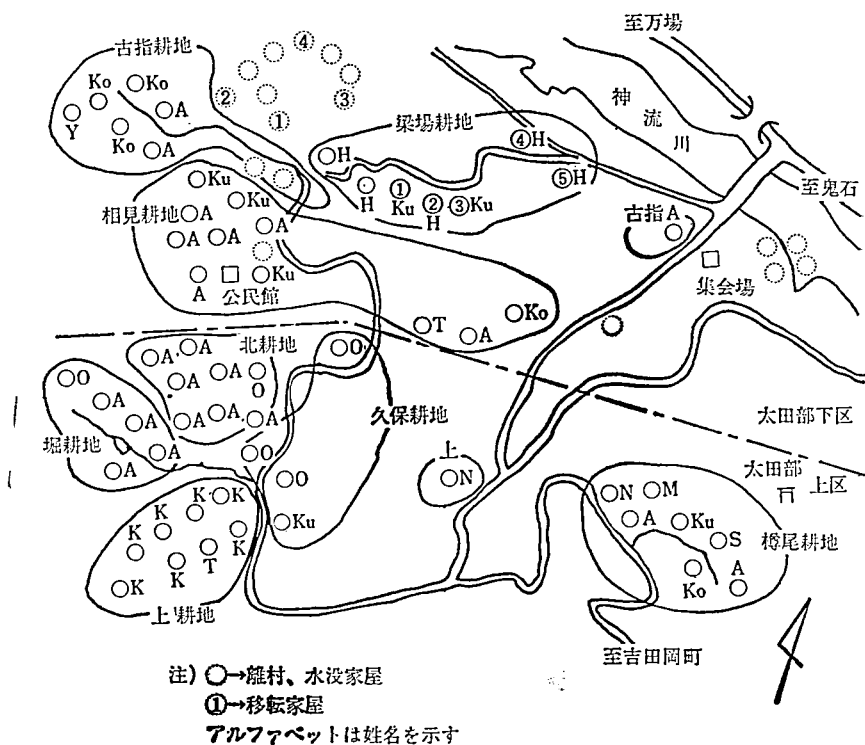
(5) 有賀喜左衛門「日本家族制度と小作制度 上」(有賀喜左衛門著作集) 未來社一九七五年八〇〜八二頁

(6) 山田氏「前掲書」一二〇頁

(7) 山田氏「前掲書」一二〇頁

## 二、太田部集落の生活組織とムラ規約

〔第Ⅰ図〕 太田部集落図



同集落は、塚山中腹を中心に八耕地<sup>①</sup>からなる集落である。各耕地は、近隣集団的な性格を有する最少の単位で、現在五九戸の家相互の集まりである。第一図は、こうした家と各耕地の配置関係を示したものである。耕地は、地域に生活する人々にとって冠婚葬祭や講などの年中行事をはじめ、年三回の定期的な共同作業である「道つくり」(道普請)の夫役の際は、分担の単位とされ共同責任により行なわれる。その他、徴税や供出もこの住民の最も身近な耕地の社会的結合をおして貫徹されていく。このように、生まれ育った時から日常生活上きわめて重要な意味をもつ血縁・地縁的な近隣交渉の場を形成しているのが耕地である。

こうした隣家を基礎にした社会結合として八耕地は、行政上の下部組織として便宜的に上区（三戸 一三七名五耕地）下区（二六戸 八七名 三耕地）に分けられる。両区とも区長一名を選出し、各耕地の代表である伍長（年番制）を補佐役にし行政自治体の補助的な機能を行なっている。さらに両区は、農協組織の場合、農家組合長を各一名ずつ選出し、森林組合では参与をおいている。

また同集落の場合、吉田町議会に選出される町会議員の果たす役割は重要である。議員は、集落の地域代表的な性格を有し、教育問題を始め、地元住民の要望を反映させる意味でも住民総会によって決定されている。任期は、二期と慣例化している。そして、町議選出者がその後区長の役を勤める場合が多い。

このように、住民自治組織は構成され、一つの地域の生活共同体として住民の社会生活の第一次的な場となっている。そして、日常生活における住民の意識と行動を制約するものとも強いわく組みになっている。こうした集落や耕地によるさまざまな生活規制は、慣例やしきたりとして厳守され、保持されていくのであるが、同集落の場合、住民相互の申合せによりこれを確認し、積極的に規制している。

#### 大字太田部申合規約

吾太田部ハ山ヲ環ラシ川ニ境シ交通ノ不便ハ教育ニ産業ニ他ニ遅ル、コト遙ナリ因ツテ之レカラ向上発展ヲ期スル為メ郷是ヲ定メ取極メラ約ス

#### 郷是

- 一、道義公德ヲ重シ苟モ虚榮浮華ニ流レサル事
- 一、国体ノ大義ニ準シ一家郷土ノ和合繁榮ヲ期スル事
- 一、時間ノ確守納税ノ不怠産業ノ進展教育ノ向上勤儉ヲ行努メテ怠マサル事

このように、郷是には「虚榮浮華に流されない事」「一家郷土の和」「勤儉」といった生活の冗費節約と部落の和を確認強制するものである。従来のしきたりが崩壊過程にはいつて、これをふたたびひきもとすために村落住民の確認



をもとめる意味のものではない。以下申合規約は「組合」「太田都区会」「祭典」「婚嫁葬祭祝事」「入営暇郷」「屋外窃盗取締」「山林並ニ植樹」「総会」に至り、生活の細部にわたって部落による規制がおこなわれている。

### 組合

一、大字太田部ハ一団トシテ内ニ耕地組合ヲ設ケ耕地組合ヲ成シ總テハ組合トナス

一、相見組合 一、古指組合 一、築場組合 一、北組合 一、久保組合 一、上組合 一、堀組合 一、楯尾組合

一、組合ハ組合員相互扶助ノ責ヲ負フモノトス

……(略)……

### 婚嫁葬祭祝事

一、婚礼上棟養子披露等ノ祝儀ニハ親戚ハ別トシ組合員以外召カサルモノトス

但シ特ニ所要人ヲ依頼スルハ此ノ限りニアラス

一、諸祝儀喪応品ハ可成手輕ヲ專一トシ酒三献日数ハ二日以上多カラサルモノトス

一、婚礼養子等ノ節ハ披露トシテ左ノ等級ニ応シ現金ヲ提出シ以テ一般ノ召待披露ニ代フ

但シ呉祝儀ハ之ヲ要セス

一等金拾円 二等金五円 三等金貳円 等外金五拾銭

一、提出ノ金員ハ之ヲ太田都区費ニ納ル

……(略)……

一、会葬者並ニ見送人ニ対シ余飯ヲ出サ、ル事

一、葬礼ニ造花ヲ寄贈スルハ之ヲ廃止ス 但シ公共団体若クハ特別ノ縁故アルモノハ此ノ限りニアラス

一、逮夜忌明年忌等ノ供養ハ總テ簡便ニシ召待者ノ如キハ可成少数ノ縁故ニ止ムル事

……(略)……

### 屋外窃盗取締

一、訴告ハ人ノ忌ム所ナリト雖モ公安ノ為メ左ノ項目ヲ犯スモノハ直ニ告訴スルモノトス

一、他人ノ山林中ニ入り生竹木ヲ伐採及傷害スル者

一、苧草場ノ生草ヲ刈リ取ル者

一、農作物ハ勿論山野ノ菓物ヲ採取スル者

一、結立ヲ為シタル夏刈地ノ生草ヲ刈リ取ル者

以上の如く、冠婚葬祭時等の様式をこまかく規制し生活の冗費節約を促し、部落秩序の維持を、部落の意志としておこなわれているのである。また同集落の生業である林業についても、植林伐採方法を以下の如く規制しており、現在においても固く嚴守されている。

#### 山林並ニ植樹

- 一、山野ノ樹木ヲ伐採スルトキハ必ス隣地主ノ立会ヲ得テ境界ヲ定ムルコト
- 一、従来ノ畑並ニ夏刈地ヘ新ニ喬樹ヲ植付ル者ハ一応隣地主ニ交抄ヲ要スル事
- 一、喬林ヲ仕立ルニハ境界線ヨリ二間ヲ隔テ、植付ル事
- 但シ隣地主ト交抄同意ニ由ルモノハ此ノ限りニアラス

#### 總會

- 一、毎年四月三日区会ヲ開ク
- 但シ臨時總會ヲ以テ本会ニ代フルコトアルヘシ
- 一、本規約ハ永遠ニ持續ス
- 一、本規約ノ改廃ハ總會ノ決議ニヨル
- 一、大正八年四月十三日總會ニ於テ決議確定ス

このように、部落の住民に対する共同体的強制は、「一家郷土の和合繁栄」を持って村落の意志決定としておこなわれる。こうした部落における生活組織は、確かに生産力の乏しい山間地にとって將に生活自衛組織であり同じ村落共同体の一員としてつよく結合しているのである。しかし、注意しなければならないのは、こうした社会的結合の中に存在する各家々の階層の問題である。第一章においては、封建制下における身分的隸屬關係としての家抱制について述べた。次章では、同集落独特の耕地費徵收方法である「水金」「生盆金」制度について考えながら、この問題に

も触れてみたい。

(1) 秩父地方では、一般に明治以前の村落(Ⅱムラ)である大字の中に存在するいくつかの近隣集团的な家の集まりを耕地という名称で表わしている。この耕地は、講組組織や地域での小字を意味し近所付き合いにはかかせない地縁的な機能を果している。太田部集落の場合、一般的に名称される「組」と同様であり、例えば、上耕地で葬儀が出される場合、葬式の世話いっさいを耕地員が取り持ち、組んでいる堀耕地の耕地員が穴掘りなどの役目をしている。

(2) 現在行なわれている講は、古峯講、二十二夜、山の神講、精神講であり、各耕地ごとに、持ち廻りの会場の民家(ヤドという)に詳しい飲食を共にするが、お札を郵送してもらう程度に簡略化されたものには、榛名講、大峯講がある。講、年中行事等については、「山村集落の構造と地域住民の生活変化―秩父郡吉田町太田部集落の場合」明星大学社会学科研究報告第十一集 四一頁 一九七八年を参照していただければ幸である。

### 三、生盆金、水金制度と行財政

太田部集落のムラ財政を考えると、行政補助としての区費と従来からの村落(Ⅱムラ)共同体としての伝統的な生活組織を基礎にした慣行からの財源の二重の構造が存在することに気づく。前者は、行政上の末端組織として便宜的に区分された上・下両区の財源であり、これは現在、町から行政区運営補助金としておりるものである。また納税奨励金と町有林監視手当としておりるものも含まれている。そして後者は、伝統的慣行に従がって、森林伐採の際の売り上げ金の百分の一を納める「水金」、嫁ぐ際に耕地の人々へ礼金として納める「生盆金」といった住民供出の財源である。この「生盆金」「水金」制度の耕地範囲は、必ずしも両区の範囲内ではない。上区の場合、上・堀・久保・北耕地の四ヶ耕地と檜尾耕地の二つの範囲となる。こうした行政区とのズレは、住民みずからの第一次的結核体と、行政による住民把握組織体との範囲の相違である。

このようにムラ財政の存在は、伝統的慣行下での財源と地方行政からの財源との二重に規定されつつあらわれたも

のである。

そしてこのムラの二重性を媒介するものは、補助金と陳情請願運動であつた。こうした意味において町会議員が集落の地元利益代表としての性格を濃厚にもっているのである。陳情請願運動と補助金により、背負子しよいこを使つてかつぎ上げた道に代わつて、各家庭の庭先にまでマイカーの入る舗装道路が整備されてきた。

昭和十九年太平洋戦争最中諸物資配給制となり灯火用の石油も欠乏茲に万難を許し電灯工事を行い十月完成二十六年十月村費半額補助にて各部落毎簡易水道完成三十三年六月世紀の大事業下久保ダム建設計画發表され直ちに対策委員会結成工事実施に當つて七戸の水没移転者を出し公共補償として八千八百万円にて延長百三十二米幅員三・五米の永久橋が架設され神泉村榎木より梁場迄幅員三・五米の道路完成四十四年県道に編入さる梁場より大寄迄二米道路開設道路改修用として四百二万五千円の補償に依り太田部各耕地を結ぶ自動車用道路建設協議成立一般林道として上区西沢地内より下区古指迄四十年より四ヶ年計画にて延長二千三百七十米幅員三・五米総工費四千八百七十八万円地元負担金九百十二万二千円補償金四百二万五千円を含む旧林道櫛尾橋より西沢迄拡幅工事四百九米県及町負担三百十五万一千円地元負担金二十九万九千円にて施工梁場地区は四十三年より地送り現象起り九戸移転内二戸は町外へ転出補償金百五十万円にて着工され各耕地共自動車乗入道路完成工事中治安維持の為駐在巡査出張所が百二十万円の補償に依り建築され此の建物は現在農産物の集荷所として利用し学童水泳用プール建設用として三百八十五万円の補償金にて幅五米延長十五米のプール完成以上諸事業が関係官庁及町当局の絶大なる御援助と地区民挙げての一致協力と関係地主の理解ある土地提供に依り完成これが太田部の経済発展と文化の向上に貢献し平和で豊かな村作の基盤となる事を祈念し茲に記念碑を建立す

昭和四十七年四月十五日 多田正雄撰文

上井好春謹書

こうした事情は、この様に記念碑に刻まれている。こうした生活道路等の整備には、配分された補助金に多額の地元負担を伴い、労働力の提供と部落慣行下で住民に多くの負担が加重されたのである。こうした状況は、さらに昭和二十四年の林道（生活用道路である）工事決算書に記されている。

## 林道工事決算書

## 支出

一金壹千五百八十九円五拾銭也 勞務加配代

一金貳拾円也 米<sup>(カ)</sup>糧賃

一金參千二百五拾円也 セメント五袋代

一金四拾貳円也 釘代

計 四千九百六円五拾銭也

## 収入

一金五拾円 寿代

一金貳万八千円也 補助金

差引 貳万參千四拾參円五十銭也

## 記

総人足 壹百九拾一人

日 当 一人 壹百円也

金 額 壹万九千壹百円也

特種手当 石垣積三名 一人參百円

金 額 九百円

計 貳万円也

差引 參千百四拾三元五拾銭 多田苑頂り

昭和二十四年四月四日記

一金壹百円也 但島村小市人足一名前回支払不足金を支払

一金四千參百円也 但セメント二十袋

二月一日支払(運賃共代)

差引不足 一金壹千貳百五拾六円五拾銭

## 新井幸太郎立替支払

## 人夫賃支払内訳

キタ四十人	特種手当六百円	四千六百円也
クボ二十八人	貳千八百円也	
カミ四一人	四千壹百円也	
ホリ三三人	特種手当三百円	三千六百円也
ナラオ四九人	四千九百円也	
計	貳万円也	

こうした生活環境の整備は、請願運動により獲得された補助金と部落慣行下での労働力の供出と土地の無償提供といった住民に多くの負担が加重される中で進行したのである。

太田部上区の場合、区の財源は、住民より何らかの方法により区費として徴収することは行なわれていない。そして区の財源は、自治体からの行政区運営補助金と納税奨励金等によるものである（第Ⅲ・Ⅵ表参照）。またこの区費がある程度の金額になると、全戸に分配しているのである。つまり、村落住民にとって集落を維持運営しているのは、自治体による行政上便宜的に領域区分をされた太田部上区・下区の範域ではなく、伝統的に形成された住民自治組織としての「耕地」の集合体が、住民に大きく機能しているのである。ここで行政区と耕地の集合体として成立する、あくまで住民による下からの生活共同組織体とは本質的な相違があった。

また太田部上区には、二つのこうした生活共同組織体がある。一つは、上・堀・北・久保の四ヶ耕地の集合体であり、他の一つが檜尾耕地である。

この上区四ヶ耕地には、江戸期より現在に至るまで「生盆金並水金取立簿」と称する文書が大切に保管されている。「社日講」（九月中旬）には、四ヶ耕地の住民が、「ヤド」に集い年間の予算決算を取り決めている。ヤドは廻り

〔第Ⅲ表〕 昭和54年度 太田部上区区費収入支出

収 入		支 出	
金 額	内 訳	金 額	内 訳
72,210円	行政区運営補助金(役場より)	10,000円	公 民 館 ミ ザ 代
		9,900円	共 同 募 金
		8,250円	歳末たすけあい募金
		4,650円	日 赤 募 金
		1,650円	愛 の 募 金
差引残高 37,760円 累計金 105,225円			
102,000円 各戸に分配(34戸) 差引残高 3,225円			

〔第Ⅳ表〕 昭和35年度太田部上区区費収入支出

収 入		支 出	
金 額	内 訳	金 額	内 訳
300円	町有林監視手当	3,210円	共 同 募 金
15,220円	納 税 奨 励 金	2,000円	赤 十 字 募 金
		6,250円	DDT油剤5カン代
		2,455円	納 税 完 納 税 費
差引残高 1,575円 累計金 31,994円			

〔第Ⅴ表〕 昭和54年度 太田部上区四ヶ耕地生盆金並水会収入支出

収 入 の 部			収 出 の 部		
項 目	金 額	内 記	項 目	金 額	内 記
	円 3,000	大 峠 道 刈り代	社 日 講	円 4,500	社日講 飲食代十人分
道作り不 参代金	9,000	新井賢一 新井琴次 名上春一		2,040	酒二升代
生 盆 金	1,000	新井タツ子 父 新井琴次		1,000	共有倉庫代 多田茂雄
水 金	230	権田沢樺 多田芳太郎		1,000	貯水池 上井好之
〃	400	水穴大久保杉素材 多田芳太郎		1,000	貯水池 新井亀久雄
〃	1,000	金両庵樺3本 新井正義		1,600	消防器具置場 新井信則
〃	6,800	赤谷 樺 多田茂雄		2,000	乾燥塔 名上春市
〃	9,509	権田沢杉立木 久保 勇		400	カスガへ二十丁
〃	1,000	四ッ白杉立木 久保 勇		2,000	郵便屋歳暮
〃	13,150	立谷杉立木 多田喜平		30,000	座布団入箱代
〃	2,000	四ッ白杉素材 上井育男	道づくり	17,890	四月定期道づくり
〃	330	イジツ畠杉素材 新井辰信	〃	24,745	七月定期道づくり
収入合計	47,430			680	郵便箱錠前代
追加収入	81,000	五ヶ耕地共有金分配 金四ヶ耕地分	道づくり	25,655	九月道づくり
収入合計金	128,430		支出合計金	114,510	
差引合計 13,920円 累計金 109,390円 多田芳太郎（区長） 頂					

内訳 一、生盆金 1,000円 一、素材丸太立木の半額 一、立木百分の一（売上金額）  
一、足場丸太一本一円 一、六尺物十本一円 一、キワダの皮百分の〇・五



〔第Ⅵ表〕 昭和40年度 太田部上区四ヶ耕地生益金並水金収入支出

収 入 の 部			収 出 の 部		
項 目	金 額	内 訳	項 目	金 額	内 訳
水 金	円 90	大田 松 新井正義		円 1,000	郵 便 御 礼
〃	7,000	穀畑杉 多田芳多郎	道づくり	5,305	春道づくり
〃	3,600	ワワクリ 杉 久保 勇	〃	3,225	夏道づくり
〃	3,810	ツツジ杉 久保 勇		2,680	万場神宮御礼
〃	350	立谷 薪 (文化薪) 久保 勇		850	飯料10人分 新井巳之吉払
〃	17,500	四ツ白杉 多田正雄		200	共有倉庫敷地代金 多田正雄払
〃	2,000	サメ沢 杉 多田正雄		100	乾燥庫敷地代金 多田正雄払
〃	280	奥沢 薪 (文化薪) 多田正雄		100	消防器具置場小作 新井廉十郎払
〃	5,800	クラボネ 杉 多田正雄		100	前沢物置小屋小作 新井國次払
〃	200	上太駄 杉 多田正雄		20	紙代 新井巳之吉払
〃	40	上太駄 杉 新井信則		100	消防サイレン敷地小作 新井危久雄払
〃	120	一ツ石 木炭 新井藤八		100	権之沢橋木 多田正雄払
生 益 金	300	名上静子 名上春市	合 計	13,680	
水 金	800	ワワクリ 杉 上井育男	差引収入	99,910円	
〃	1,800	堀ノ沢 杉 上井英夫	累 計 金	763,466円	
〃	4,620	ツツジ 新井巳之吉	貸 付 金	80,000円	
〃	10	ツツジ 新井巳之吉	郵便貯金	502,036円	
生 益 金	300	新井みさ多 新井廉十郎	39年3月迄の利子	77,701円	
	50,000	採石	貯金へ	100,000円	
	3,000	沼代	81,430円 上井英夫 (区長) 頂り		
	3,000	大峠道刈り	内訳		
貸付金利子	9,600	上井育男より利子	本年度木炭木代ハ一俵百円トシ		
	500	39年度大峠道刈り増 加分	通過炭ハ半額五拾円也		
合 計	113,590		薪粗炭木代八円ト決定ス (ママ) (ママ)		
			文化薪ハ一束三円トス		

〔第Ⅶ表〕 太田部上区四ヶ耕地生盆金並水金（昭和54年9月25日）

		な し	0.1～1	1～5	5～20	20～30	30～50	50ha以上	
太田部上区 四ヶ耕地	北耕地 (8戸)		1,000 生盆金 3,000 出不足金	3,000 出不足金	1,000			630	8,630
	久保耕地 (5戸)				13,150		1,000 10,500	6,800	31,450
	上耕地 (8戸)	3,000 出不足金			2,000				5,000
	堀耕地 (5戸)			350					350
	合 計	3,000	4,000	3,350	16,150		11,500	7,430	45,430

番による民家が会場となるが、次のヤドに当たる家がこの本箱に入った文書類を保管している。この生盆金及び水金、四ヶ耕地の入用にあててものである。第Ⅴ表と第Ⅵ表はこうした耕地費の収支決算を表わしたものである。また太田部集落の他の耕地においても、同様に耕地集合体である生活組織を維持運営させている。

まず徴収方法であるが、「水金」といって森林伐採の際の売り上げ金の百分の一を納める制度がある。当然山林所有の大小により異なってくるわけであり、巨額の差を生じている。また「生盆金」とは、嫁ぐ際に耕地の人々へ礼金として納めるものであり、現在千円と決められている。昭和四十年頃までは、この他に、木炭の出荷に応じて徴収されていた。また、昭和五十二年度より年三回の道普請への出不足金を徴収することになっている。

徴収された耕地費は、道普請の際の飯食費や消防器具等の管理費などに使用されている。また累計金の一部は、住民への貸付けもされているのである（第Ⅴ・Ⅵ表参照）。こうした地域の独自性を保守し、厳格な統合性により、住民の第一次的な生活と意識の体系となり得るわけである。

昭和五四年度の耕地費収入を所有山林規模別にみたものが第Ⅶ表である。当然水金制度による徴収は、山林所有の多い階層に依存するものである。このことは、集落・耕地内への発言力を持ち得ることになる。いわゆるオモダチ階層であり、事実、区長・村会議員・農家組合長・森林組合参事・公民館長等の役職は、こうした階層に属しているのである。つまりオモダチ階層（土地もち層）の地域におけるヘゲモニーのもとに部落は動いている点もみのがせない。このことは、第一章で述べた「家抱制」による身分階層的支配に変わって地域の主導力を担うものがこのオモダチ層であった。

こうした山間地に位置する同集落では、その立地上の特性と相俟って、都市的生活様式の浸透や過疎地にみられる諸種の現象にもかかわらず一方こうした伝統的生活慣行が未だ強固に存続している。そして自治体との関連では、地域に敵存する二重構造を具現化しているのである。つまり、集落のもつ機能は、行政上の末端組織（ムラにおいては行政対応組織）としての両区と、耕地の連合体という伝統的自治組織としての集団性との二重の構造を持ちつづけているのである。

（かました ひとし、本学大学院社会学専攻修士課程）